Green Planet

susabi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｇｒｅｅｎ　Ｐｌａｎｅｔ

【Ｎコード】

Ｎ６０９３Ｃ

【作者名】

ｓｕｓａｂｉ

【あらすじ】

２０７７年の近未来。女性フォトジャーナリスト七海が解き明かす地球と人類の謎。

［プロローグ］

はじめまして。私は、七海。

今は、２０７７年。ちょっと地球がおかしくなってきました。
というよりも、人間が危なくなってきたようです。

地球にとってもう人間は不要なのでしょうか。

この小説は、七海の日常を通じて、今の危機感をみなさんにお伝えして、未来を変えてもらおうとする試みです。

［プロローグ］（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第1話

「あーついなぁ、また、乾燥機壊れちゃったのかな」

あ、おはようございます、七海です。最近また乾燥機の調子が悪いんです。何度もパシオしてるんですけど、波長が合わないからってたらいまわし。おかげで、毎日９０％湿度で暮らしてます。

今日は久々のお仕事で、これから出かけるので乾燥服は温存。いくつも持ってる人がうらやましい。

勝手に自分のことばかりしゃべりそうなので、ちょっと状況説明しておきますね。今は２０７７年。昔言われてたように温暖化が進行して、皆さんの時代から2度ぐらい上昇しました。

大変なことになったのは、その対策のために人間がやったことなんですよ。石油の使用量を減らすためにバイオエタノールを得るために地表を全部畑に変えてしまったのです。

さらに二酸化炭素を吸着させるために、道路からビルの壁面から何から何まで、苔やら蔦やらで緑化が義務図けられて、外気の湿度が異常に高まってしまったのです。

それでも、石油は尽きてしまったし、実際に気温は上昇してるので、生き残りと称して緑化をやめることは出来ません。

湿度の高い状態では、カビや細菌の繁殖が旺盛となるため、家の中は常時乾燥機が廻っています。そして、外出時には乾燥服という昔のバイクのスーツのようなつなぎ服を着て生活をしています。

これも電気で乾燥させるので、高価な電気を大切に使わないといけないのです。

おっと、陸からパシオです。
「こら七海、早くこいよ、また遅刻かよ」
「えー、あと30分もあるじゃん。これから出ま〜す。」

という事で、仕事に行ってきます。

そうそう、パシオっていうのは、簡易テレパシー電話のことで、頭の中でしゃべれば、相手に伝わる便利モノです。手のひらサイズの装置を体のどこかに接してれば使えます。

私はこれでもフォトジャーナリストなんです。雑誌社の睦と組んで、この地球で起こっている謎を解くために、あちこち取材を続けてます。

続く

第1話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第2話

おはようございます。七海です。昨日は、遅くまで取材でほとんど寝てないんです。でも、体は眠たいのですが、頭がちょっと興奮状態で、ベットで寝たままパシオを使って書いてます。

留守中に乾燥機は直ったみたいで、今朝は快適です。昨日、陸に言ったら手を回してくれたみたいで、やっと遠隔修理してくれました。

最近の修理はパシー技術（これもテレパシーみたいなもので、パシオの原理）で、ホームロボットを使って直してくれるんですけど、我が家のホームロボットは旧型で、波長が古くてコントロールしにくいらしいのです。

とはいえ、子供のときからお世話になってるこのホームロボット”シト“とは別れがたくて、まだ使ってるのですよ。丸みがあって新型よりかわいいんです。

今朝の興奮状態は、昨日の取材の内容なんですよ。なんとあのノーベル物理学賞の大樹博士にお会いしました。陸の雑誌社の３０周年記念特集に向けた企画モノなんです。

雑誌のＰＲにもなるので、どんどんこのブログに書いていいよといってくれたので、書いちゃいますけど、大樹博士ってなかなか素敵

な方なんですよ♡、って、そんなことじゃないんですけどね。

みなさんもよくご存知と思いますが、今から30年まえに、まだ30歳の若さで反重力物質を発見して、「世界を変えた」といわれた方です。

あれから30年近くたっても、私がいまだに地べたを歩いてるのは、ちょっと不満なんですが、電車や車が、宙を飛んでるのはこの方がいたおかげなんですね。

それで、昨日の取材は、皆さんが分かってるようでよく分からないこの反重力物質について、大樹博士から直接説明をうけたり、発見に至るまでの秘話をお尋ねしたのです。

大樹博士は、物理学者の世界を超えて独自の世界観をお持ちで、その話に引き込まれてしまいました。

しかもその内容が、私が追い求めてる地球と人間の関係にまで発展して、取材を超えて夜通し語り合ってしまったのです。

続く

第3話

大樹博士へのインタビューですけど、私はカメラマン兼任なので、研究室に入ると挨拶もそこそこに、カメラのセッティングから始めました。

最近はあまり見なくなった紙製の本のにおいがすこし鼻に来るのを我慢しながら、フラッシュを2本、天井と壁に向けてセット。窓の外のツタの合い間に広がるサトウキビ畑を背景にして、座ってもらうことにしました。

カメラは最新のニコン3D3。パシー技術のおかげで、これを首から下げておけば私が見たとおりにまばたきするだけで、ちゃんと立体映像として記録してくれるんです。

私は生まれつきの眼力があるって、よく言われました。目がちょっと緑色っぽいので、相手が私の目を注視してくれて、人物撮るのは結構得意なんですよ。

大樹博士も出会って早々に興味深そうに私の瞳を見つめてくれているので、この仕事も上手くいきそうです。まあ、使えるものは使わないと。

「先生、パシオはB階層まで開放していただいていいですか。」陸

が念のため博士に尋ねておきます。

「私はCでもDでも、どこまでも開放してもいいけど、そんな雑念まで拾ったら、かえって編集が大変だろう。」博士は、意地悪そうに笑って応えてくれました。

脳波を拾うことの出来るパシオには、４段階のレベル設定があるんです。こうやって、しゃべるレベルをA階層。しゃべる内容を考えるレベルがB階層です。

CやD階層になると本人も制御できていない雑念まで拾うことが出来るのですが、こういう正式な場での利用はふさわしくないのです。

「では、さっそく伺います。今回は月刊「アイザック」創刊３０周年記念として、反重力物質発見３０年を迎える博士の特集ですので、様々な角度で博士の内面に迫りたいと思います。」陸がいつもにない緊張した面持ちでインタビューを始めました。

「そもそも、反重力物質を研究されたきっかけから、教えていただけますか？」

「私は、子供のころからSF映画が好きでして、ちょっと古いですが、スターウォーズのエピソード9は何度も見ましたよ。あのシリーズに出てくるランドスピーダーという宙を走る乗り物があるんで

すが、あれをつくるのが夢でした。」子どものような瞳で語る博士の姿に私はカメラアイで何度もフラッシュを焚きました。

「私もその古典的名画を見させてもらいましたが、いまの乗り物を実によく予想していますね。」映画好きの私は思わず相槌を打ってしまいました。

「そうじゃないですよ。技術者もデザイナーも、みんなあの映画に影響されすぎて、それ以上のものが生み出せないのですよ。」博士は少し不満そうでした。

「ところで、それまでモノを宙に浮かばせるには飛行機やヘリコプターのように空力を利用しようと考えるのですが、反重力物質というものに着目されたのはなぜですか？」陸がすぐに話を戻していった。

「光と影の原理ですよ。重力があるからには、反重力があるはずで、重力のある地球のどこかに存在してるはずなんです。」

『・・・それを地球から聞いたとは、信じてもらえないだろうが・・・』

「え、最後なんていわれました？」パシオが拾ったB階層の声に二人は耳を傾けた。

続く

第3話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第４話

「ははは、変な独り言まで聞かれてしまいましたね。」大樹博士は汗をかきながら、意外と明るい笑顔で答えてくれました。私はどうも「地球」という言葉に敏感になっているのです。これだけ人類が長年お世話になっているのに、いまだに何一つ分かっていないじゃないですか。

窓の外に広がるサトウキビ畑は、海さえも埋め立てて広がっていく。そのうち海が無くなるのではないかと思うと、七海という私の存在さえ消えてしまうような恐怖を感じるのです。

博士は、この地球についての手がかりを知っている人物に間違いないようでした。

「大樹博士が発見した反重力物質“エディット”についての本当の話を語っていただけますでしょうか。重力を持つ物質の組成を編集しなおして生み出したという“ＥＤＩＴ”の本当の話を」

「信じてもらえないでしょうが、いつかは話さなければならないことなので、私もそろそろ潮時ですから。」大樹博士は、姿勢を正して過去を振り返るように話し始めたのです。

「私の学生時代の友人に空というのがいましてね。」

「ソラ博士ですか？　パシー技術の産みの親で、その後、世間から身を隠してしまった天才科学者ですね。」

「知ってのとおり、彼は脳波を信号に変えて増幅させる研究をもとにパシオ社を設立して、２０歳代で巨額の富を得たのです。富と名声を得ながらも彼は地道に、本来の研究に、影ながらまい進していたのですよ。」

「影ながら？」

「それは君たちマスコミのせいですよ。富を得たものを引きずり降ろそうと、すぐ躍起になる。　私なんかは、彼に学んだので、一切の特許を放棄して、見てのとおりの貧乏暮らしですよ。」

「プライバシー報道に関してマスコミも反省すべき点はありますが、空博士の研究内容に批判などした覚えはないのですが。」

「そうかな、彼は、パシー技術を応用して、動物や植物との会話を試みていた。植物との会話に成功したと発表したときの反応はどうだったかな？　植物が『もっと、生きたい』という望みを語ったと言った時のマスコミの反応は？」

続く

第４話（後書き）

この小説はブログで、先行公開されています。
ブログでは、イメージ写真やコメント欄があります。
七海ファンはこちらのブログに集まっています。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／

第5話

おはようございます。七海です。

昨日、植物との会話って書きましたけど、植物はすごくゆっくりしゃべるんです。花が咲くときもゆっくりすぎて、目では見えないじゃないですか。それと同じように会話もすごくゆっくりなので、気長にゆっくりとした気持ちが大事なんですよ。

しかも、言語が違うので、翻訳するのも大変な知識が必要となるんです。そんな根気のいることを好む人はわずかしかいないんですね。

もっともっと根気よくやさしく話し続ければ、仲良くなれるかも知れないですね。

では、話を続けます。

陸は、ばつが悪そうに答えた。

「みんな楽しい会話ができることを期待していたのに、成立する会話のテンポの遅さに、がっかりした世間の関心が向かずにマスコミもその後一切取り上げなかったのです。何でも瞬時に情報を収集できる時代にこの話題はそぐわなかったのですよ。

それにそのとき、多重結婚していた空博士のスキャンダルのほうが、世間の関心の的だったのですから。」

「でも、その成果のおかげで、植物保護法も出来て世の中植物だらけですよ。」私はすぐに付け加えた。

「それで、地球との関係は、どうなったのですか。」陸が話を戻していった。

「彼は世間から身を隠して、人間以外との会話の研究に没頭したのですよ。ただ、その成果は、発表されなかった。かれはすでに富と栄誉と人間への失望を経験していたので、彼だけの楽しみとして利用していたのですよ。」

「唯一会話が楽しめたのは、くじらだった。空博士は、世間から逃れるため、海に出てヨットで暮らしていたが、くじらは人間と寿命が同じぐらいなので会話もスムーズで、くじらたちの音楽のような言葉に癒されていたのですよ。

そんなある日、ヨットに仕掛けてあるパシーセンサーに、くじらよりもはっきりとした強いメッセージがはいってきたのだ。空博士は、くじらの種類を見分けるために、パシーセンサーに大きさを測る機能を持たせていたのだが、その数値は１２万キロというとてつもない異常値を示していた。

そのメッセージは直訳すると、こうだった。

『潮汐から立ち上る光を捉えよ。さすれば、重さから開放される。』

それは、まるで神の言葉のようであった。彼は身震いをした。１２万キロとは地球の直径だ。パシー技術で、地球が彼にメッセージを送ってきたのだ。」

続く

第5話（後書き）

この小説はブログで、先行公開されています。
ブログでは、イメージ写真やコメント欄があります。
七海ファンはこちらのブログに集まっています。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／

第6話

空博士は、その地球のメッセージの意味を相談するため、重力に逆らう力を研究していた私のところを訪ねてきたというわけです。

私はそのメッセージを聞いて、ひらめいた。長年気づかなかったことがここに記されていたのです。

『潮汐から立ち上る光を捉えよ。さすれば、重さから開放される。』

私は重力に逆らう力を生み出すためには、とてつもなく大きなエネルギーが必要だと考えていたのですが人類が作り出す力には限界がありました。潮汐と聞いたときにピンときたのです。なるほど、月の力かと。月の引力というすごいエネルギーによって起こる潮汐で生じるものを捕らえればいいのだと。

私は、さっそくそのエネルギーが集約されているであろう波打ち際にいって、観測機器を設置してみたのです。光といわれているものを徹底的に探し出してみた。

すると引き潮のときに砂浜のなかから、空に向かって放出される特殊な光の粒子を見つけたのです。それが“エディットｅｄｉｔ”の発見でした。

私はこの事実をどうやって公表するかを悩みました。空博士は、「

地球の言葉というのはきっかけに過ぎないので、堂々と自分の発見として発表すべきだ。」といってくれたのです。地球から聞いたなんていうと気のふれた科学者になってしまうぞと。

それでも私は良心の呵責があったので、ノーベル賞はいただいたが、特許は開放したのです。人類共通の利益になることがせめてもの救いになる思ったのです。

もう気づいたでしょうが、編集を意味する“エディットｅｄｉｔ”とは、“潮汐ｔｉｄｅ”の反対読みですよ。私は真実をこの名前に託したのです」

大樹博士は、一通り話し終え安堵したような表情で遠くを見つめていました。長年隠してきたものを一気に吐き出して、すっきりした様子でした。

私はあまりの真実に呆然としていましたが、偉大な発見というのはこういう神がかりなヒントを得ることも、その人の運だろうと思ったのです。大樹博士でなければ、地球のメッセージをすぐに紐解くことは出来なかったでしょう。

すでに、インタビューの予定時間は大幅に過ぎていました。陸はこの内容を早く雑誌社に戻って、編集したがっている様子でした。私は気になることあったので、写真をもっと撮るといって、あとに残ることにしたのです。

陸が帰ると大樹博士がすぐに話しかけてきました。「七海さんの目を見たときにすぐにわかりましたよ。

七海さんは、空博士のお嬢さんですね。

空博士も同じ目の色をしていました。だから私は全てを話す気になったのです。」

続く

第６話（後書き）

この小説はブログで、先行公開されています。
ブログでは、イメージ写真やコメント欄があります。
七海ファンはこちらのブログに集まっています。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／

第7話

「はい、でも私には父の記憶が何もないのです。もの心ついたときにはもう父はいませんでした。スキャンダルのせいで、母は何も語りませんでした。ですから父が誰であるかは伏せて生きてきました。でも、まだ生きていたなんて。会わせてもらえますか。」

「実はノーベル賞を受賞してから、その後、空博士に連絡が取れなくなったのですよ。これが空博士と連絡を取る唯一の手段のパシーナだ。あなたのお父さんから借りていたので、あなたに預けますよ。あなたなら使いこなせるしょう。」大樹博士は、パシオよりも小型で緑色の水晶のようなきれいな装置を手渡してくれた。

「パシーナ？」

「空博士が、パシオを進化させたものだ。パシオは燃料電池を必要としたので、パワーが限られて、送信範囲に限界があった。専用の中継所が必要なので海では使えない。

このパシーナは生体エネルギーを使うので、自分の体からいくらでもエネルギーを供給できる。遠くに離れたところと通信するためには多少体力がいるが、可能性は無限大だ。

それと、私はうまく使えなかったが、パシオを持たない相手の脳波が読める機能が組み込んである。」

「勝手に相手の脳のなかへ？パシー技術でもそれはできないはずよ。」

「くじらと、どうやって会話したと思う？」

「くじらにパシオを取り付けることは可能ですよ。それに水を介してなら少しぐらい離れていてもできそうだだし。」

「雑誌上はそうしておいてほしいが、実は空博士は可能にしてしまったのだ。今までは理論上は可能と思われていたがパワーがぜんぜん足りなかった。生体エネルギーを利用できるようになったおかげで実現したのだ。

ただ、意識を集中して、相手の波長にあわさないと入っていけない。私は何度か試みたが、まったく無理だった。」

私はパシーナを手のひらに包むように優しく握ってみた。すると透けていたパシーナが淡い緑の光に包まれていった。ひんやりとした感触が暖かいぬくもりに変わっていった。そしてその緑の光は、自分の心臓の鼓動に合わせて脈動を打ちはじめた。

続く

第７話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第8話

「さすがは、空博士のお嬢さんだ。すぐに同調している。私が握ってもそんな鼓動は生じなかったよ。」

私は身震いがしてきた。

「これはとても危険なものですね。もし、このパシーナが悪い人の手に渡ったら、あるいは誰でも買えるようになったら、人間はお互いどうなってしまうのでしょう。お互いの考えがすべてわかってしまうなんて、そんな生活は成り立たない。」

「そうなんだよ。だから私はパシーナのことを今まで誰にも話さなかった。もちろん空博士もこの技術を発表する気などまったくない。この世にこれは2つしかない。それにどうやら、私のような人には使いこなせないようになっているようだ。実際ただの通信機能しか利用できなかった。」

「七海さん、あなたはこれを使ってまずはお父さんを探すのです。それからこのパシーナを返せばよい。そしてその特殊な機能は使わずに、いざというときのお守りと思っていればよいではないですか。」

「大樹博士、今日のインタビューの内容でひとつお聞きしてもいいですか。」

私はパシーナをそっと手からはなして、気持ちを切り替えた。

「なんでもかまわないよ。」

「地球はなぜ父にそのメッセージを伝えたのでしょうか。大樹博士には失礼なのですが、エディットが発見されて、確かに移動に便利な乗り物ができました。

でも、それだけが目的とは思えないのです。地球にとって人間が重力から開放されることでメリットがなければ。

地球が人間や植物と同じように意識をもって言葉を発する生命体であるならば、生きのこるための何かを求めてるはずです。」

「あなたのお父様も同じようなことを考えていましたよ。私には残念ながら答えは見つからなかった。むしろ、この発見が地球に悪影響を及ぼしているのではないかと思っているぐらいです。

知ってのとおり、実用的なレベルのエディットは、波打ち際にある砂に含まれる物質を精製して得られるのだが、極わずかしかない採れない。

そのため採掘会社は海岸線を買い占めて、次々と採取しては埋め立てて、新たな波打ち際を作り出し、沖へ沖へと埋め立てを進めている。

宙に浮くためのエネルギー消費は不要となったけれど、人間の活動領域が空中にも広がっただけで、人口も増大し、食料やエネルギーの需要はさらに拡大し、あらゆる資源が掘りつくされ消費されていく。

こんなに体を蝕まれていくことが、地球の本当に望む姿なのでしょうか。」

「父の考えは？」

「空博士にそのような悲壮感はなかった。彼は、地球は人間よりも、もっと賢い生命体だと考えていた。人間のすることはすべて計算済みのことだと。」

「では、人間のしていることは全部地球のためだと？」

「そのことについては、空博士は多くを語らなかった。でも、地球の声を直接聞いた彼は地球を信頼していることは間違いなかった。あとは、七海さんが直接あって、お父さんから話を聞くしかないのです。地球の気持ちに一番ちかいのはあなたのお父さんですから。

それにそのパシーナ、それはお父さんが地球からのメッセージを受け取ったのと同じ仕組みできています。あなたも地球と会話ができ

る可能性があるということですよ。」

大樹博士と別れてから、帰り道はなんだか心細くなって、すぐにタクシーに乗り込みました。パシーナは大事に首から提げたけれど、再び手で握ってみる勇気はありませんでした。

無人の四足のカプセル型タクシーは静かに夜の街へ舞い上がりました。このタクシーを飛ばしているエディットが地球からの贈り物だとは、まだ信じられませんでした。

第1章　プロローグ　終

第8話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第2章　第9話

みなさん、おはようございます。七海です。

大樹博士の反重力物質エディット発見秘話の告白のおかげで、月刊アイザック３０周年特集号は大反響を得ました。私の撮った大樹博士の顔写真がトップを飾り、テレパシー通信機パシオを通じて、購読者に配信されました。

パシオに外部記憶装置をつけておくと、受信したデータを一覧にまとめて保存して、好きなときに網膜描写で、雑誌を見ることが出来ます。ビデオ映像を見ることも出来ますが、月刊アイザックは静止画で構成するほうが、記事の印象が強くなるという考えで作られています。

いま世間ではその声の主が地球か神かで大騒動です。幸い大樹博士のノーベル賞受賞に反対する声もなく、博士の反重力物質発見の名誉は保たれました。

また、地球の声を聞いた空博士探しが本格化しましたが、いっこうに見つからないようです。もちろん私と空博士の関係はいまだに公表されていませんので、私には寂しいぐらい関係ない話題となっています。

相手の脳内まで覗けるテレパシー装置パシーナはまだ試していませ

ん。なんだか今すぐに父に会う勇気がないのと、この騒動が落ち着くまで、待ったほうがよいと思えたからです。

さて、この余韻に浸るまもなく次の仕事です。アイザックプレス社の依頼は、この反重力物質エディット採掘精製最大手のタンダード・エディット社へのインタビューです。

今の時代は企業の時代となっています。すでに国家という枠組みは消滅し、企業がお金という絶対的な尺度で、人類を相互支配しています。

大樹博士が発見したエディットはその特許が公開されたため、無数の企業がその採掘や精製に殺到し乱立したが、買収によって競争に勝ち抜いたのがタンダード・エディット社でした。

タンダード・エディット社の社長はマスコミ嫌いで知られています。マスコミが自社に不利益をもたらすと考えているようです。

ところが今回は大樹博士のエディット発見の秘話の直後に月刊アイザックからのインタビューということで、初めてマスコミが社内に入ることが許されました。それに私は表紙写真を撮ったフォトジャーナリストということで、ご指名だったのです。

続く

第2章　第9話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第2章　第１０話

半重力物質を採掘精製し販売するタンダード・エディット社の本社は、まさに空に浮かんでいます。小規模の商業的な施設はすでに空で営業を行っていますが、ここまで本格的に空中に浮いている巨大施設はまだ数社に過ぎません。

普段、地上から眺めていたこの空に浮かぶ緑の球体に入るのはなんだかとても緊張します。四足カプセル型タクシーに乗り込むと、自動的にその球体へと導かれいきました。

近くでみる緑色の球体は、何層もの円盤状のものが重なって球体となっていました。中に入ってしまうと普通の建物とかわらない雰囲気です。警備だけはものすごく厳重で、タクシーのカプセルごと空中でしばらく探知された後、降りることができました。

そして、個室に入って専用の白い服に着替えさせられた上に持ち物はすべて預けられました。

ただ、パシーナは父の形見の宝石ということで探知でも異常が見つからずに携帯が許可されました。カメラは撮影許可場所のみで警備のヒューマノイド型ロボットから手渡されるという厳重さです。

「お待ちください。いま、社長がみえますので。」天井の高い真っ

白な部屋に入ると秘書らしき女性が私を椅子に案内しながら声をかけてくれた、と同時ぐらいに奥の扉が開いて中から銀色の大きな円盤ようなものが宙を浮いてスーッと入ってきました。

何かのロボットだろうかと思って近づいてくるのを見守ると、目の前で平らな面がすっと傾き、中から青年の顔が現れました。驚いて立ち上がるとその青年は笑顔に変わっていました。

「いや、驚かしてすまない。そんなに驚くとは思わなかったよ。私が社長のフェラーです。こんな格好で申し訳ないが、私には生まれつき手も足もないもので。」

「はじめまして。アイザックプレスの七海です。」

「あなたが七海さんですね。大樹博士の特集号を拝見しましたよ。あの博士が何でも話してしまったように確かに魅力的な方だ。私もいつか世間に姿を現さなければと思っていたのですが、そのデビューをあなたに任せることにしました。どうぞ写真も撮ってください。」

私がカメラを用意すると、フェラー社長は自ら話し始めました。「私の父がタンダード・エディック社を創設したのは、大樹博士の論文が発表された直後でした。当時3歳だった私には、ロボットの腕と足がついていましたが、大地を自由歩くほどに操ることは容易ではありませんでした。父はそんな私のために、半重力物質の採掘を

始めたのですよ。」

フェラー社長は回想するように話しながら、壁面のほうに向かうと白い壁に立体映像が浮かび上がってきた。「おそらく読者の皆さんは反重力物質エディットの採掘と精製の仕方に興味があるのでしょうから、今日はその方法を簡単にご説明いたしましょう。」社長は詳しくその製造の過程を話し始めたが、私の疑問に対する答えは入ってなかった。

「あの、フェラー社長、私から質問してよろしいですか。」なかなかペースがつかめないので、一段落したところで声をかけてみた。

「すいません、インタビューに慣れないもので、つい自分ばかりしゃべってしまいました。」人はよさそうである。

「採掘方法はわかったのですが、なぜ、採掘後を埋め立てて、沖に進んでいくのでしょうか。」

「さすが、七海さんだ。もう核心を突いてきましたね。」

続く

第２章　第１０話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第2章　第11話

フェラー社長はこういった。「これだけ科学が発達していながら明確にいえないのが残念だが、なぜだか、埋め立てないと反重力物質エディットが生じないのです。

わが社の科学者も長年その研究を行っていますが、埋め立てた土の組成や成分と、採掘後の成分比較などを行うと山の土を埋め立てるとその発生が強くなる傾向があるのです。

それに山を削り、埋立地を増やすと畑が増やせて、二酸化炭素も減り、食料もエネルギーも増やせるわけですから、人類に貢献していると自負していますが。」

「事情はわかりますが、海を埋めていくペースが速すぎるような気がしますが」

「いま、埋め立てている海岸線は、この70年間の海水面上昇によって後退した陸地のまだ半分にも満たない面積ですよ。海を埋め、サトウキビを植えて気温の上昇を抑える。

これはまさに地球が人類に託した大事業ではありませんか。私は大樹博士のインタビューを読んでそう感じましたよ。私はまさに今日、そのことをここでお話したかったのです。」

私は、フェラー社長の話し方に圧倒されながらも、そんな単純な話だろうかとスッキリしない気分であった。

そんな私を気にする風でもなく「七海さん、せっかくこの空中都市に来ていただいたのですから、ゆっくり見学していってください。副社長のミーサが案内しますから。他に聞きたいことがあったら、ミーサに聞いてくださいよ。彼女は何でも知ってますから。

では、私は次の会議があるので失礼しますよ。いや、七海さんにあえて本当によかった。また、是非ゆっくりお話したいものですね。」といいたいことだけ散々しゃべって去っていってしまった。さすがここまで企業を大きくしてきただけの人である。

社長のそばにいた小柄な女性が近づいてきて私がミーサですと小さな声で名乗って、部屋の外へと案内してくれました。「では、まず最上階へご案内します。これを身につけてください。」黄色い厚手の固いベストを手渡されて、いわれるままに身に着けてみました。

すると体がふわりと宙に浮かび上がって、驚いてミーサにしがみついてしまいました。

「上手ですね。説明しなくてもよさそうですわ。あとは慣れれば自由に飛べますから。わが社の最新作のランクトンです。

まだ、試作段階で完成したのは2着だけですけど、実用には十分なレベルですわ。社長が乗っていたものを小型化してみたんです。」ミーサは笑顔で説明しながら彼女もランクトンを身に着けた。

「最初は手をつないでいきましょう。」彼女は私の手をとるとふわりと宙に浮いて、大きな吹き抜けの中を上へ上へと舞い上がっていった。まるで妖精の粉をかけられたウェンディがピーターパンと窓の外へ飛び出した時の気分でした。

続く

第2章　第11話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第2章　第12話

最上階は巨大なプラットホームになっていました。「ここは、宇宙船の発着場です。わが社はいま、宇宙船の開発に全力を注いでしますわ。エディットのおかげで飛躍的に宇宙開発が進んでますから。その製品開発に乗り遅れましと必死なんです。採掘だけの商売は限界がありますからね。」

「なぜ、人間は宇宙に行こうとするんですか？」ふと聞いてみたくなった。

「あら、七海さんらしくない質問ね。それは人間の限りない欲望を満たすためじゃないかしら。七海さんは宇宙へは行かれましたか？」

「いえ、まだなんです。」

「それじゃ、ちょうどよかったわ。今開発中の宇宙船に試乗させてあげましょう。あっという間に地球を一周して戻ってこれますから。カメラを持っていってくださいね。」

断るまもなく、小型機のところに連れて行かれました。「これは、2人乗りで宇宙ステーションや月に行くことを想定しているの。今までの宇宙船のイメージを変えようとしてるのよ。操縦も不要でタクシーのように自動操縦ロボットが目的地に連れて行ってくれるのよ。」

楕円型の透明な機体に座席が二つ並んだだけのシンプルなつくりで

した。メカニックがミーサの指示で設定をしながら、私たちを乗せてくれました。思ったよりゆったりとした座席に腰掛けて、透明なハッチを閉めたと同時に気体が左右に揺れながら急に浮かび上がりました。

なれない浮遊感に戸惑ってミーサの方を見ると、彼女もなにやら不安げな顔で下のメカニックの方を見ているのです。メカニックたちもあわてた様子で、手を大きく振り上げていました。

「どうかしたの？」

「おかしいわ。こんなに急に浮上するはずはないわよ。」

ミーサは青ざめた顔で、パシオを使ってメカニックに応答を求めている。小型宇宙船はすごいスピードで空を駆け上っていった。あんなに大きかったタンダード・エディット社の空中都市が小さな点となり、あっという間に宇宙空間に飛び出してしまった。

「応答は？」

「もうパシオの通話距離は越えてしまったので、いま、船の光速通信に切り替えたんだけど、反応がないのよ。」

「トラブル？操縦ロボットに指示は出せないの？」

「操縦ロボットも混乱して対応が出来てないわ。こういうトラブル

の時には、光速通信で宇宙ステーションから操作してもらうのだけど、通信ができないなんて想定外よ。それにこの速さはこの船の性能を超えているわ。なにかがおかしいのよ。」

第2章　第12話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第2章　第13話

彼女は言いながら、はっと青ざめた。「しまった。このランクトンだわ。しかも2着も。」

「どうして、こんなもので？」

「さっきはゆっくり浮かんだだけだったけど、このランクトンは本当は軍事用に開発されたもので、地上で高速飛行ができるように特殊な高密度エディットが入ってるのよ。実はまだ成分的に安定してなくて、この船のエディットと共振してパワーが2乗、いや3乗にもなっているのよ。」

「酸素とかはどれぐらい持つの？」

「二人でせいぜい一日分よ。まずはこの船を止めないと。」

「このランクトンを外へ放出できないの？」
「宇宙空間で開けれるハッチなんてついてないわ。」彼女はしきりに光速通信を試みているが応答がない。

「少し冷静になりましょう。」
どちらともなくお互いを見詰め合った。ここで騒いでもどうにもな

らなかった。

外を見ると、美しい地球が遠ざかっていくのが背後に見えた。はじめて宇宙から見る地球が、まさかすでにこんなに遠くにいってしまったなんて。地球と私の関係はこんなに気薄なものだったのだろうか。

「大丈夫よ。今頃、会社でもおお騒ぎで救援隊を手配してるはずよ。私これでも社長婦人なの。ごめんなさいね。主人もご機嫌だったので、私まで調子に乗ってこんな目にあわせてしまって。」

はたして、このスピードに追いつける宇宙船があるのだろうか、それをいってはなんの望みもなくなるので声には出さなかった。ふと私は胸に下げているパシーナを思い出した。

「お願い通じて。」

手のひらでパシーナを握りしめた。緑のパシーナに光が灯って、脈動が始まった。「だれか、助けて。お願い。　・・・お父さん、・・・おねがい助けて。」

続く

第2章　第13話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

第2章　第１４話

パシーナの脈動とともに目の中にも明るい光が立ち込めてきた。それはどこかきれいな水のなかにいるような光景だった。

『だれだ。だれがパシーナを使っているんだ。』突然耳の奥から声が聞こえてきた。

『お父さん・・・！　　空博士ですか。　　七海です。
　あなたの娘です。』

『ななみ、七海か、本当に七海なんだね。』　私は今までのいきさつと状況を手短に伝えた。

『そこにいるタンダード社の女性と話させてくれないか。』

『いいけど、どうすれば？』
『手を握ってくれればいい。』　私は、きょとんとした表情のミーサに状況を話し、手を握った。
『ミーサさんは、その船のことをどこまでわかるかね。』

『私はエンジニア出身なので基本的なことはわかるけど、直接この船の開発にはかかわってないので、詳しくはないわ。博士のところ

を通じて私の会社に連絡はとれないですか。』

『わしはいま、海の底で隠居の身なのだ。地上と連絡がとれるところまで行くのに丸一日かかってしまう。』

『お父さん、酸素が一日しか持たないの。』

『ミーサさん、その船の操縦ロボットの頭脳はどこ製かね？』
『ランツブレイン社のE型よ。』

『いいか、七海よく聞くんだ。パシーナは生体エネルギーを使ってるから、このまま超遠距離通話を続けると、七海の体が必要以上に酸素を消費してしまう。

ランツブレイン社製の頭脳は生物細胞でできている。感情は持たないが中身は人間のようなものだ。パシーナで意識を集中して、その頭脳に入り込むんだ。私のところからでは無理だが、そこなら直接触ることができるので、そんなに難しいことではない。

入り込めればあとは会話をするようにその頭脳に働きかければよい。わしが乗ってる潜水艦の頭脳もランツブレイン社製だ。いつも思い通りに動いてくれているから大丈夫じゃよ。

七海、早く会って顔が見たいよ。話しておきたいことが山ほどあるのでな。じゃあ、酸素がもったいないから、通信をきるぞ。　　『

『あ、お父さん　　・・・　　』

再び静けさが広がった。

続く

第２章　第１４話（後書き）

この小説はブログにて先行公開されています。
ブログで読まれたい方はこちらへどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／ｓｕｓａｂｉ７７．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／
このアドレスをコピペして、使ってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6093c/

Green Planet

2010年10月8日14時40分発行